

行政調査報告書

- ・ 北海道議会（教育委員会）
- ・ 札幌新陽高等学校
- ・ 日高町立日高高等学校

令和4年11月21日（月）

令和4年11月22日（火）

大阪維新の会大阪府議会議員団（教育部会）

◇視察目的

大阪府の教育施策に活かすため。

◇視察期間

令和4年11月21日（月）から令和4年11月22日（火）まで

◇視察参加者

紀田馨議員（教育部会長）、富田武彦議員、中川誠太議員、西野弘一議員（計4名）

◇視察先・行程

《11月21日（月）》

14：00 北海道議会（道教育委員会）

16：00 札幌新陽高等学校

《11月22日（火）》

10：00 日高町立日高高等学校

◇視察内容

1)

○場所：北海道議会事務局 第1事務局会議室

○説明者：北海道教育庁

生徒指導・安全課 課長補佐 高川 志野

教職員課 課長補佐 小寺 善臣

教育政策課 課長補佐 伊勢 幸人

施設課 課長補佐 氏家 直久

係長 富田 拓貴

○内容：学校の災害対策

教員の働き方改革への取組み

過疎化地域での生徒数の少ない学校への対応

〈説明〉資料に基づき説明

〈質疑応答〉

中川誠太議員：防災棟が設置されているとのことだが、教職員に対する防災研修は日頃どの程度やっているのか。高校生防災サミットは高校生が主体的に防災を学んでいくため重要と思っているが、道内でどこまで浸透して、直近（11月18日）開催でどんな成果があったのか。

トイレについて、北海道では洋式化40%が令和3年度以降に80%ということは、今年度中には80%になるという認識か。

説明者：教員全員が使えるかは分からないが、日常生徒には使わせていない。イメージとしては体育館・管理棟がありそれをつなぐ渡り廊下に併設して防災棟をおいていると思う。ずっと使っていないと動かない等あるかもしれないので、事務員や教頭、校長が年に何回かチェックしていると思う。

中川誠太議員：生理用品は備蓄しているか。

説明者：備蓄していない。市町村の備蓄として、急に市町村が持って行けない場合は、学校のスペースを活用して、備品を置いている学校もあるよう。その中に、生理用品もおいてあるかと思う。

説明者：トイレの洋式化について、府の方は配管工事からと大掛かりな工事をされているようだが、道の場合は便器のみ、和式を洋式に変える手法をとっているため、工事費も抑えられており、パーセンテージがあがっている。
必要とする便器について、当時建設した便器の数は、最大生徒数を元に算出しているが、その後生徒数が減っているのです、その減っている生徒数に合わせて必要な便器を洋式化するという考え方。

中川誠太議員：洋式化はウォシュレットや温座をつけているか。

説明者：コロナ対策でつけたため、自動の洗浄はつけたが、ウォシュレットはつけていない。温座もつけていない。ただ、身障者用のトイレについては、電源入れればウォシュレットになる。

説明者：教員に関する防災研修として、14 管内にわかれており、各管内で年 1 回学校安全に関する研修、防災・防犯・交通安全に関する研修をしている。また、兵庫県のアースという教員が被災地にきて学校再開を支援するというものがあるが、一度来ていただいて好評だったため、自分の学校が被災になった時に学校再開をどうしていくか、心のケアどうしていくかの研修を年 2 回実施している。

中川誠太議員：学校施設の老朽化に伴って防火設備が作動しないなどあるかと思うが、高校生の防災サミットで設備の維持管理やそのほか、学校で足りないところ等意見はあったか。

説明者：防災サミットは完全に高校生が司会・進行し、自分たちが何をやっていったらよいかということ協議するため、今のところ学校施設のテーマは出ていない。

富田議員：防災棟の整備について、153 校だが、防災棟整備は元々指定避難所になっている所につけるということであれば、概ね 90%つけているというイメージでよろしいか。

説明者：平成 7 年地震防災対策特別措置法が国で施行され、8 年度から順次整備している状況。当初国の支援が地方債 100%で手厚かったが、今はそこまでない。道立学校も再編整備が進んでおらず、老朽化も進んでおり、雨漏り等に優先している状況。学校の改築があって整備する等ない限り、新規で防災棟の整備はしていない。

富田議員：指定避難所が 175 校の中で、防災棟の整備が 153 校という意味合いでよかったのか。指定避難校が防災棟を整備するというイメージか。

説明者：イメージはそうだが、市町村によって指定避難所がある時から指定されるので、もしかすると指定避難所でないところも防災棟があるかもしれない。

中川誠太議員：施設整備について、北海道ならではの問題点はあるか。クーラーの設置率など。

説明者：クーラーの設置率は全国ワースト 1 だと思う。ただ、声はあるので検討しているところ。特別支援学校は一部保健室に整備しているところあり。主には、老朽化に伴う雨漏りやボイラー等の整備が多い。

紀田議員：北海道の高校通学区は何区ぐらいにわかれているのか。大阪は 150 区を 100 区ぐらいにしないと、子どもの数にあわないという話があるが、大阪府は通える範囲だが、北海道は広いのでそのあたりどうか。

説明者：難しい問題だが、そのあたりも踏まえながら学校整備を行っているところだが、町や村に学校が一つもないところもある。片道 1 時間かけて通う人もいると思う。

富田議員：北海道は公私の割合はどのくらいか。

説明者：担当部署は別になるが、以前函館市にいたが、函館の中では6対4ぐらいだったが、全道になると例えば8対2とかなるかと思う。

中川誠太議員：防災棟の老朽化もこれから話になるのか。

説明者：あると思うが、普段使用しないので、学校からあまり声は上がってきていない。体育館や、学校の他の施設の老朽化の声が大きいので、学校内の優先順位も低いのでは。

中川誠太議員：トイレについて、80%洋式化した後に、府として取り組んでいくことはあるのか。

説明者：設備管改修工事に合わせて、洋式化や身障トイレの整備を図っていく。

紀田議員：採点が教員の負担になっている。デジタル採点について、今年から予算化している。働き方改革に効果あると思うが、北海道では既に取り入れられているが、働き方改革の効果はどうか。

説明者：取り組んでいる学校数が極めて少ない。小学校は効果があがっていないということが分かっている。テストの紙がスキャンに適合していなかった。中学校は効果がでていると聞いている。あとは教師の知識の差やパソコン・スキャナーの性能にも左右される。

紀田議員：部活動について、練習試合をするような人数がおらず、2学校で併せてすればという話があるが、なかなか前に進まない。地域移行もなかなか進まないが、北海道でやってみて、改善したなという実感はあるか。

説明者：北海道は学校間の距離があるのでなかなか難しい。交通機関がない場所もある。生徒数も少なくなっているので、頭を抱えている問題。

富田議員：大阪では近場で練習は一緒にできるが、大会が2校合同では出られないとなっているため、そこを変えていかないといけない。

説明者：それも課題。北海道は学校間距離がかなりあるので、大阪とは少し事情が違うのかなと思う。再編整備の考え方も違う。

紀田議員：大阪では学級数が少なくなると統廃合の話になるが、北海道の特別な加配ルールで学校運営ができていいのか。例えば、この学校で地理開講ができないなどないかないか。

説明者：北海道では1学年で3学級の学校が45校ある。学校間が広いので、統廃合するにしても、通学手段が課題となる。教科によっては遠隔事業を行うこともある。

中川誠太議員：教員の負担を減らすため、スクールロイヤーやSSWを配置している。生徒数が違うと思うが、業務の量がちがう。

富田議員：中間層が抜けており、そこがうまく指導等機能していないように思う。若手が2～3年で辞めたり、精神的に病んで休む教員もいる。そのあたりどうか。

説明者：小さい学校だと1ケタ台の定数しか置けないところがある。ベテランの先生から学ぶという機会がもしかしたら少なくなっているかもしれない。



2)

○場所：札幌新陽高等学校

○説明者： 、細川広報担当

○内容：TikTok BUの活動

〈意見交換〉

富田議員：以前、フジテレビで取り上げられており、TikTok BUを作られて志願者数が増えたと話題になっていた。どういうきっかけでこの部を作ろうとされたのか。

説明者：もともと Facebook、Instagram、Twitter の公式アカウントを持っていたが休眠状態だった。志願者数が減ってきた中で、改めて広報戦略として紙ベースだけではなく、中高生が一番使っているものを考えた時に、Twitter は古く、YouTube は手間がかかる。そこで中高生に直接働きかけられるものとして TikTok を新たに始めた。はじめは、生徒でなく教員がやっていたが、だんだんと生徒たちも一緒にやっっていこうとなった。きっかけとしては、生徒がやりたいというよりは、オープンスクールのツール、学校見学等の告知用として始めたところに、生徒にも是非やらしてもらおうとして、プロジェクトチームを呼びかけたところ、生徒が集まってきた。TikTok 部と名乗っているが、部活動ではない。正式には「TikTok BU」アルファベット BU。動画をやる有志の集まりというもの。今では、新陽の TikTok を目標にして、後に続いてくれる学校が少しずつ出てきた。ただ、どちらかというと高校で SNS 禁止をしているところがある。SNS の使用に気をつけるよう呼び掛けている中で、学校が先頭切っていくことに先生方が足踏みする。大人の合意形成を図るのがなかなか難しいと思う。本校は「本気で挑戦する人の母校」がスローガン。これは生徒だけでなく先生も本気で挑戦するということ。これに則り、まず大人が挑戦していった。

富田議員：始まりは昨年か。

説明者：ちょうどコロナになって1年目。2020年頃。はじめは自宅にいる在校生に向けて作ったメッセージ動画も数多く上がっている。

西野議員：たくさんの動画があがっているが、部員があげているのか。それともアカウントを共有していて、誰でもあげれるのか。

説明者：アップロードは教員がしている。動画の企画や撮影、編集は生徒に手伝ってもらっている。生徒の肖像権の部分は、必ず大人が確認して、アップロードの最終責任は教員としている。

中川誠太議員：こちらは元々女子高か。TikTok では女性が多いイメージ。

説明者：元々女子高だった。今年で 65 年目を迎えるが、ちょうど昭和から平成になる辺りで共学に変わり、共学で 30 年少し。今では、男子生徒が多い。

中川誠太議員：アプリの信頼性の話は及ばなかったか。

説明者：校内でも安全性について話し合いはあったが、アプリの信頼性で辞めようとはならなかった。私学だから取り組みやすかったのかもしれない。公立の学校だと行政と折り合いつけないといけないという事情もでてくるかもしれない。

富田議員：北海道内で真似していこうという学校は出てきたか。

説明者：あまり聞かない。興味はあるが、なかなかできないと聞く。TikTok だけでなく、当学校は高校教育を再創造するということで、校長もできない理由

がない場合はやろうとしている。

富田議員：広がらない理由として、公立の壁があるのでは。公立には昔ながらの考えをもつ場合が多い。道内はほとんど公立で私立が少ないからか。

説明者：それもあるかもしれない。私立は学校経営をしないといけないという切実な状況がある。そのため、生徒集めを工夫する必要がある。私立高校でも伝統ある高校と戦うためには、自分たちでマーケットを作る必要がある。

紀田議員：教員は最近ダンスを教える人もいるが、そういう人が振り付けを考えているのか。

説明者：大学時代にダンスをやっていた教員が2名いる。

中川誠太議員：TikTok だと、どんな学校かというのが見やすいと思う。ホームページや説明会ではなく、こういうのが時代にあっているのでは。

説明者：今の子どもたちは、1時間見ない。5分程度で判断するので、その点は合っているのでは。

中川誠太議員：編集は誰がしているのか。

説明者：大人が撮った場合は大人がしている。子どもも編集することもあるが。最終チェックは大人がする。

中川誠太議員：決まりやルールは作っているのか。

説明者：子どもが映っているのかだめなのかや、あまり品のないものに関してはあげない。ただ、事細かく文章で決めていない。

紀田議員：どれぐらいの生徒が参加しているのか。

説明者：TikTok BU に関わるのは10名ほど。ただ、写っている子は学校の3分の1ぐらいはいると思う。強制はしない。強制するとストレスになってしまう。

中川誠太議員：保護者からクレームはなかったか。

説明者：在校生からは無い。テレビで取り上げられるとアンチが出てくるので、批判的なコメントが出たり、まとめ動画を上げられたりする。動画は最近発見し学校で対応した。

富田議員：志願者数は増えたか。

説明者：オープンスクールの申込みが3倍に増えた。

来てくれた人に興味を持ったきっかけアンケートをとると、複数回答で4割がTikTok、その次がホームページが32%、インスタは1.5%、ユーチューブ・ツイッターは4%となっている。

SNS は入り口に過ぎない。それきっかけで、詳細が見たければホームページへ誘導する。ホームページは敢えて大人びた形にしている。ちなみに保護者のアンケート結果は、ホームページが40%、次いで教育内容27%、TikTokは8%しかない。やはり世代により入り口が違うということ。

一昨年からの学校との差別化ということで、eスポーツにも取り組んでいる。今では広がって、新鮮味がなくなったが。

新しいことにすぐ取り組める、意思決定の速さは本校の誇れるところの一つ。

TikTok もすぐ更新ができるようにしている。ルールや決裁をとっているとすぐ廃れてしまう。2日に1本動画をあげるようにしている。

ホームページなどの媒体もそれぞれ特色を出している。ホームページの作成にあたっても生徒に作成に入ってもらっている。

中川誠太議員：学校のスローガンはどのようにできたか。

説明者：元々、自己肯定感が低い学生が多かった。公立にも私立にも行けず、最

後に来るような高校だった。スローガンの頭に「日本一」本気で挑戦する人の母校とあったが、日本一でなくてよいということで、取った。最近では留学したいという子もあり、実際に留学・進学している。海外に目を向けている子もいる。

中川誠太議員：没になる動画は割とあるのか。

説明者：許可取らずに撮っている動画などはやはりある。今は批判的な動画などが上がっているので、今は少し大変な状況。ただ、今のところ、学校の直接電話や問い合わせはきていない。入試イベントでキャンセルもないので、直接的な影響は確認されていない。

中川誠太議員：生徒はどこから通っているのか。

説明者：市内全域から。寮生活者は少ない。道外から来ている子もいるが、絶対数では少ない。寮は借上げで用意している。

紀田議員：テレビで取り上げられたのは、地方局からか。

説明者：一番初めは北海道新聞が取材に来た。そのあと、地方局で取り上げられ、そのあと、フジテレビに取り上げられ、その他の大手にも取り上げられた。

紀田議員：ここでごんばった子たちは推薦入学などのため、評価をしているのか。

説明者：ワーキンググループという新陽独自でつくったプロジェクトがあり、生徒主導で部活ではないが、プロジェクトをつくるということで、動画やパンフレットを作るプロジェクトとして、課外施活動の一つとして位置付けられている。

直接学力には繋がっていないかもしれないが、高校時代頑張ったことのアピール方法の一つとして、面接等でどんどんアピールしてもらえる。

富田議員：校則にはいろんな項目がある。

説明者：札幌のトップ高校は公立の札幌南高校だが、そこは校則がない。当然それは自分でコントロールができるということ。今まで、教育界でもあれは札幌南高校だから許されると言われていた。本校でも、今でもこれで本当にいいのかと思いながら、とはいえ決めた校則なので、見直すべきは見直しながらやっている。

紀田議員：校則は保護者や地域の声が大きいという話を聞くが、こちらはどうか。

説明者：校則を見直す際は、生徒と保護者、地域の自治会長に入ってもらっている。自治会長は本校の評価委員会にも入ってもらっている所以、事前にもさまざまお話をしている。関係者とまだ対話中のものもある。細かなことはあるが、今のところ特段大きな問題は起きていない。



3)

○場所：日高町立日高高等学校

○説明者：校長 大木 康弘
生涯学習課長 関本 裕昭

○内容；学校概要、産業学習

〈説明〉資料に基づき説明

〈質疑応答〉

紀田議員：町立で学校を持っているのは財政的に大変かと思うが、国税も入っていると思うが、それで全て賄っているのか。追加負担等あるかと思うが、それでもなお、町立として学校を持っている理由は。

説明者：日高地区と紋別地区の小学校・中学校で70キロぐらい離れているため、まず統合は難しい。国の考えとして、スクールバス使っても1時間以内なので、1つに統合するのはまず無理。紋別地区内も広く、地区の端から端まで、バスで1時間半。通学するのに時間がかかるため難しい。将来的に中学校については、8人ぐらいになれば統合を考えないといけない。小学校についてはある程度複式で出来るので、地域としても学校がなくなると地域が廃れるというところもあるので、統合は難しいと考えている。一番の壁は、通学距離。

紀田議員：居住要件等いるのか。

説明者：日高高校に入った時に、住民票を移していただくので補助ができるという仕組み。人数が少ないから出来る補助かと思う。

中川誠太議員：寮の長期休養期間は年末年始か。

説明者：夏休み、冬休み、春休み、3年時の家庭学習時は家にお帰り頂く。寮は閉鎖している。

中川誠太議員：セーフティネットになっているということだが、中退をされる方は年何人かいるのか。

説明者：今年度はいないが、昨年度は1人いるが、そこまで多くはない。

中川誠太議員：卒業後は就職が多いか。進学が多いか。

説明者：だいたい、進学。

中川誠太議員：就職になるとどこが多いか。

説明者：自衛隊や地元に戻って、地元で就職活動される方が多い。

紀田議員：全国から生徒が集まっているが、日高に住んでもらう狙いはあるのか。

説明者：今はない。地域を衰退させたくないという思いで継続している。平成の初めはリゾート開発の予定もあり、そこで働くということも考えておられたと思うが、今はない。

中川誠太議員：地域の交流はあるのか。

説明者：定時制でやっているため、あまりなかった。今は総合学習の中で地域の課題を解決するということをやっている。それで昼間やっているの、ようやく今地域の方と絡むようになってきている。今はやんちゃな生徒というより、話さない、あいさつしないというような生徒が多い。

西野議員：スキーコースの子たちは道内の子か。

説明者：必ずしも道内ではない。スキートレーニングがあるため、基礎体力や生活リズムが整う。気づいたら健康的になっている状態。逆に実家に帰ると昼夜逆転生活に逆戻りして、親御さんが申し訳ないということがあった。

中川誠太議員：生徒は携帯を持っているのか。

説明者：ほぼ全員持っている。

富田議員：スキーコースの子たちは卒業後どうしているのか。

説明者：進学が多い。

〈授業・校舎見学〉



〈質疑応答〉

西野議員：今年から全国のスキー場が1.5倍値上げしているが、スキー場に行く時のお金はどうしているのか。

説明者：リフト券は自己負担。日高のスキー場ではシーズン券を買っており、1万2千円ぐらい。日高のスキー場は12月～3月第2週で終わるので、そのほかのスキー場に行く場合は、生徒のリフト券は町で買う。

中川誠太議員：学校の先生はどうやって通勤しているのか。

説明者：学校のそばに教員住宅が整備されており、地方学校に配置になったら、そこに入るパターンがある。基本的に異動になった市町村内に住む。

紀田議員：高校の教員はどのような採用になっているのか。

説明者：高校は、建物は町立で建て、そこに教員に派遣で来てもらっている。

富田議員：産業学習は教育員会が担当しており、教員が担当するのではなく教育員会からお手伝いに来ているという形になっているということか。

説明者：その通り。通常の異動で職員が来ている。ただ、ここは特殊でスキーができる職員でないとはいけない。

紀田議員：御校で卒業した子たちは、来られた時と比べて、一人で生きていけるような、自分を信じる力、社会に出ていこうとする意欲がついたなと実感できる子が多いか。

説明者：本校ではスクールカウンセラーは15年間してもらっており、教育相談を教員も含めてしてもらっている。そのカウンセラーが言うには、きめ細かくやることにより、生徒が大きく変わっている。これが本校の特色だと強くおっしゃっている。長くいるカウンセラーが見ても、効果的であるとみている。

西野議員：道外から来られる生徒たちは、何をきっかけに御校を知って、選ばれているのか。

説明者：一般的には、町のHPで募集案内をしている。ディスプレイング広告といって、「北海道 高校」と検索すると、なるべく日高高校が前に出てくるようにしている。

西野議員：キャパの問題があると思うが、様々な人が高校を知るとかなりの人が希望すると思う。

説明者：潜在的な人数はたくさんあると感じるが、（情報が）届かない。今回は北海道の不登校の生徒たちが集まる「適応指導室」というところに行きって説明する、あるいは、小学校のお子さんにこういう選択肢があるということで広報をした。だいたい市町村が抱えている不登校の児童・生徒の1割ぐらいしか、教室に来ていない。では9割の児童・生徒、保護者にどう伝えるかというのが最大の課題。もっている広報ツールはネットしかないし、全国でもツテや口コミはない。

紀田議員：2月の委員会で、誰かが、このような学校があって、府立を辞めていく生徒に紹介したらどうかと質問してはどうか。ただ、生徒は増えると思うが。

西野議員：こういう学校に人もお金も交流できるような仕組みがあれば。大阪で一から作るのは難しいので。

紀田議員：人間関係をゼロからやり直せる距離がある十全寮制度ということもあり、生活をやり直せる大きなきっかけとなる。

中川誠太議員：校長先生の任期は3年で異動。他の教員は6年か。

説明者：一般教員は6年、管理職は2～3年で異動する。

中川誠太議員：大阪府では2～3年では校長のマネジメントが腰を据えてできないと

いう考えの元、大枠として5年ぐらいを任期としてやっていくべきだと話している。教育庁としても2～3年の任期では、腰を据えてマネジメントができないという話を現場から聞いている。3年で特色ある学校を作っていくことをどういうふうに考えているのか。

説明者：基本サイクルは2年というのが私の考え方。教頭の時に大阪とは違い北海道の中規模校は4間口から5間口のこと。規模が大きくなればなるほど、急発進、急停車、急ハンドルがきかないので、じっくり組織を変えるためには時間をかけないといけないが、中規模校は来た時に初めからリサーチをして、課題を見つけて、ブレずに行うと、私の経験上半年で変わる。先生方と同意識を変えていくか。最初の半年が勝負。校長がブレずに、強くおすわけでもなく、でも、ブレずに先生方と議論を進める。半年で意識が変わり始めて、仕組みづくりも年内で作っていく。1年でそこまですると、あとは、2年目で実装をさせる。自分たちでやっていって、でも問題が出てくるので、そのときにどう変えていくのかということをやれば、2年で組織は変わるということを私は体験した。大規模校ではないが、小・中規模校は変えていけると思っている。

紀田議員：牛や馬は写真撮影がメインか。

説明者：そのとおり。牧場等に写真撮影依頼をするとだいたい快く受け入れてくれる。もともとの基幹産業は林業だった。漁業もししやもさけがブランド化しているが、他の地域では競走馬の育成をしている。

中川誠太議員：大阪では子どもたちが自然と触れ合う機会が少ないので、非常に重要な場所だと思っている。子どもたちが自分の目標を見直すきっかけにもなると思う。

